

酪農郷べつかい 農業の歴史を振り返る-その1

別海町ではじめて農耕を試みたのは加賀伝蔵という人物です。現在の秋田県八峰町(はっぽうちょう)の生まれで、寛政11年(1799)に幕府により設置された野付通行屋で支配人やアイヌ語通訳をしていました。安政4年(1857)に野付半島で畑を耕し、本州から色々な種を取り寄せ27種の雑穀を作ったと言われています。



加賀伝蔵と野付半島開墾図

明治に入り北海道開拓使は、政策の一環として本州から移民を進めました。開拓資金や馬の貸付を受けて開墾を始めましたが、機械も無く、厳しい自然との闘いで思うように進まず、漁業などお金になりやすい仕事に移って行きました。

そうした中でも明治の時代に清実喜三郎、上杉昇太郎は牛を買い乳を搾るなど、別海町酪農の先駆的な試みを行いました。

明治31~32年(1898-1899)に西別殖民地の区画解放を契機として西別川流域を中心に入植が進み、海岸から内陸へと殖民地区画が進み農耕従事者の定住が始まりました。

さらに、明治43年(1910)の北海道第一期拓殖計画、昭和2年(1927)の北海道第二期拓殖計画により各原野への団体移住による入植が積極的に進められて行きました。

開拓者は入植するとまず、原野の一部を焼き払い、掘立小屋を作り土地の開墾をはじめました。本州で米作りをしてきた農民が、寒い土地で農業を進めることは大変なことで、道具、肥料も十分ではなく、技術も遅れている中で苦労を重ねたようです。

当時の農業は混同農業が奨励されましたが、主力はあくまでも燕麦や蕎麦などの雑穀農業でした。こうした中、昭和初期(4-7年(1929-1932))に起きた冷害凶作により壊滅的な打撃を受け、農民たちは村役場や支庁に食糧や資金の補助、冷害に強い農業への切り替えを請願しました。当時の北海道長官佐上真一は、現地視察



昭和初期のおがみ小屋(入植者の住宅が間に合わない時に作られた。)



昭和初期の様子

を行い農民から実情を聞き、昭和8年(1933)1月に主畜農業を基本とする「根釧原野農業開発五カ年計画」を策定し遂行していくことになりました。一戸あたりの牛の頭数も少なく牧草を刈るのも、

乳を搾るのも全部人力でした。一般農耕作物は夏期収穫物を中心とし、次第に寒冷地農業としての体質改善をはかりながら、営農の基礎確立へと着実に推し進めていきました。

戦時下統制の傾向を示しはじめると農業経営にもひずみが生じ始めました。米穀地帯でない根釧原野にも穀作を中心とした作付けが強制されるなど、ようやく確立した酪農などの適地適作の基本が崩され農業は疲労への途をたどっていきました。(来月号につづく)



昭和初期頃、家族写真

企画展開催中！

「地図で見るべつかい」

時代とともに変わりゆく町の様子を館所蔵の地図からご紹介いたします。特別プレゼントもご用意しておりますので、ぜひ、ご来館ください。



- 期 間 平成28年7月22日(金)～9月30日(金)
- 場 所 郷土資料館第2展示室



「別海村鳥瞰図」(上)をプレゼントします。(先着100名)

加賀家文書館特別展「バイバル展第2弾」

「近世の別海を探るⅠ～ニシベツ・ベツカイ篇」当館が所蔵する「加賀家文書」と同年代に書かれた文献史料をもとに、別海町の近世(江戸時代)の様子を紹介したものです。

9月30日(金)まで、実施しておりますので、ぜひ、ご来館ください。

別海町郷土資料館だより No.205

発行日 平成28年8月1日

発行所 別海町郷土資料館

別海町別海宮舞町30番地

電話 0153-75-0802 (FAX 兼)

e-mail kyoudo@betsukai.jp

編集後記 7月の日照時間が約70時間、ほとんど太陽を見ない月となりました。今月号は農業の歴史を掲載しましたが、このような年が続くと、やはり畑作は、難しい土地柄となるのでしょうか。そんな厳しい自然環境にもめげずに闘ってきた先人たちの苦労があつての今かと改めて実感いたします。そろそろ晴れてほしいですね。(K.I)